石見高津柿本神社をめぐる人麿伝承

雪野　真優子

一

柿本人麿は、多くの謎が残る万葉歌人である。現代にも人麿の伝承・伝説は全国に残っているが、その真偽のほどは定かではない。本稿では、島根県益田市に所在する高津柿本神社をめぐる人麿伝承について取り上げる。高津柿本神社は、人麿を祀った神社であり、元をたどれば、人麿が石見の地で亡くなったことに由来する。

人麿伝承の中でも大きな問題として挙げられるのが、鴨山伝承である。これは、人麿が亡くなった地とされる鴨山が、どこに存在していたのかという論争であるが、神道宗紀「人麻呂終焉の地と津和野の人々―万葉集および高津柿本社奉納文書から―」[注1]を参考に、主な説を三つ挙げる。一つ目は、斎藤茂吉氏による石見国江の川説である。斎藤氏は、島根県江津市にある江の川上流、湯抱温泉の北西にある鴨山が終焉地であるとしており、『万葉秀歌』上巻（昭和十三年、岩波書店）の中で、昭和十二年一月に、大字湯抱に「鴨山」という名前の山を発見したと記述しているという。二つ目は、梅原猛氏が支持する石見国高津説である。島根県益田市にある高津川の河口沖に、鴨山が存在したとする。しかしながら、この鴨山は万寿三年の大地震により、海底に沈んだとされ、現在は目視できない。梅原氏は、『水底の歌―柿本人麿論―』（昭和四十八年、新潮社）で高津の鴨山について詳しく述べており、さらにこれを科学的に裏付けるため、昭和五十二年七月に海底調査も行っている。三つ目に、河内と大和の国境葛城山説がある。神道氏は、この説を支持されている。古く、葛城山には鴨山という別称があり、又、葛城山付近には、人麿辞世の歌への返歌で、妻依羅娘子が詠み込んだ石川が流れている。これらのことから、葛城山説をとる学者も少なくないとのことである。このように、現代でも論争が続くほどの大きな伝承であるが、なぜこれほどまでに論争が続いているのかと言えば、人麿に関する資料として信用できるものは、人麿が活躍していたとされる時代（持統・文武の御代）に編纂された『万葉集』のみと非常に少なく、伝説を決定付けるには資料が足りないからである。

そこで、本稿では、『万葉集』が唯一の信頼すべき根拠であるという原点に立ちかえった上で、人麿伝承について考察していきたい。鴨山が石見の地に存在したのか否かという問題は気になるところではあるが、万葉の時代と現代を直接結びつけて比較検討することは大変難しい。それよりも考えたいのは、『万葉集』のみを根拠

とするはずの人麿伝承が、多様に変化しながら現代まで伝わっているという点である。高津柿本神社も例外ではなく、人麿に関する伝承が多く残されている。

人麿伝承の真偽はいったん脇に置きつつ、誰がどのような思いで、どのようにして、伝承を人々に伝えていったのかという伝承の享受の部分に深く触れることで、地域の伝承とどのように向きあうべきかという課題の一助となれば幸いである。

二

人麿が石見で亡くなったとされる説は、『万葉集』巻二「柿本朝臣人麻呂、石見国に在りて死に臨む時に、自ら傷みて作る歌一首」を根拠としている(注2)。『万葉集』巻二所収の人麿が詠んだ石見に関連する歌を参考に、歌から読み取れる事実を以下に述べる。

柿本朝臣人麻呂、石見国より妻を別れて上り来る時の歌二首并せて短歌

131 石見の海　角の浦廻を　浦なしと　人こそ見らめ　潟なしと〈一に云ふ、「磯なしと」〉人こそ見らめ　よしゑやし　浦はなくとも　よしゑやし　潟は〈一に云ふ、「磯は」〉なくともいさなとり　海辺をさして　にきたづの　荒磯の上に　か青く生ふる　玉藻沖つ藻　朝はふる風こそ寄せめ　夕はふる波こそ来寄れ　波のむた　か寄りかく寄る　玉藻なす　寄り寝し妹を〈一に云ふ、「はしきよし　妹が手本を」〉露霜の置きてし来れば　この道の　八十隈ごとに　万度　かへり見すれど　いや遠に　里は離りぬ　いや高に　山も越え来ぬ夏草の思ひしなえて　偲ふらむ　妹が門見む　なびけこの山

反歌二首

132 石見のや　高角山の　木の間より　我が振る袖を　妹見つらむか

133 笹の葉は　み山もさやに　さやけども　我は妹思ふ　別れ来ぬれば

或本の反歌に曰く

134 石見なる　高角山の　木の間ゆも　我が袖振るを　妹見けむかも

131の長歌は、慣れ親しんだ妻を置いて行く辛さ、後ろ髪引かれる思いを詠んだ歌であるが、この長歌に対する返歌132に、「石見」という地名が出ていることに注目したい。人麿は石見の地に住んでおり、妻がいたということが分かる。また、詞書に「上り来る」という言葉が使われていることから、人麿は何らかの理由で都に行ったことも読み取れるであろう。

次に、人麿が亡くなった時の歌を見ていく。

柿本朝臣人麻呂、石見国に在りて死に臨む時に、自ら傷みて作る歌一首

223 鴨山の　岩根しまける　我をかも　知らにと妹が　待ちつつあるらむ

柿本朝臣人麻呂が死にし時に、妻依羅娘子が作る歌二首

224 今日今日と　我が待つ君は　石川の　貝に交じりて　ありといはずやも

225 直に逢はば　逢ひかつましじ　石川に　雲立ち渡れ　見つつ偲はむ

丹比真人、柿本朝臣人麻呂が心に擬して、報ふる歌一首

226 荒波に　寄り来る玉を　枕に置き　我ここにありと　誰か告げけむ

右の一連の歌は、人麿が死に臨む際に詠んだ歌と、それに対する妻の返歌である。223歌の詞書から、人麿が石見で亡くなったこと、また223歌から、その地は「鴨山」であることが分かる。

『万葉集』から読み取れることは、人麿には石見の地に妻がいたこと、何らかの理由で石見から上京したこと、そして石見の鴨山という地で没したこと、以上の三点である。人麿と石見との関係は、人麿が「石見に来たことがある」点、および、人麿は「石見の地で死んだ」という点に限られるのである。しかしながら、『高津町誌』には、「柿本人麿朝臣は、隣村小野村に生れ、長じて都に上り朝廷に仕へ、後石見の官人として下り、晩年此の地の鴨山に歿せられたる縁由」があると記され、その生誕の地も石見であるとしている(注3)。では、人麿が石見で生まれたという説は、どこからきたのであろうか。

人麿石見生誕説の出所は、『万葉集』ではなく、江戸時代に刊行された『人丸秘密抄』である。『人丸秘密抄』には、寛文十年に刊行された初版と、元禄五年に刊行された再版本がある。江戸時代には、人麿伝承の本が再版されるまでの流行であったことが伺える。そして、このような伝承の多くは、鎌倉時代後期から存在していたそうである(注4)。『人丸秘密抄』自性論灌頂には、人麿生誕をめぐる次のような記事がある(注5)。

人丸は天武天皇御時三年八月三日に、石見国戸田郡山里といふ所に語の家命といふ民の家の柿本に出現する人なり。其歳二十余。家命尋問に答云、我は家なし。来る所もなし。父母もなし。知所もなし。只和哥の道のみしれりといふ時に、家命の主丹後国司秦冬通に申す。冬通清御原天皇に奏す。帝よろこび思召て、歌道の御待読たり。是哥姓流水之連。于時石見権の守に任。始て姓を賜。柿本人丸と号。号其時の名字也。

人麿の出現から、天皇の侍読となり、石見権守に任ぜられるまでの経緯を述べた資料であるが、傍線部で、人麿出生の地を石見国戸田郡と明記している。これと類似した説を挙げている資料を、もう一つ載せる。江戸中期に刊行された『石州高角鴨山正一位柿本大明神社略縁起』(享保八年刊)である(注6)。

石見國美濃郡戸田郷小野といふところの人家の柿本より、童形にて御出現なり(これを柿本といふ)。其家あるじをかたらひ給ふゆへ、かたらひの名あり。(中略)又没し給ふも石見國なり。

右の二つの資料を見ると、どちらも「人麿は、石見の戸田というところの、語家という民家の柿の木の下に出現した」という趣旨のことを述べている。人麿石見死没説は『万葉集』によるものであったが、右に挙げたように、石見の国は没地だけでなく、生誕の地としても取り上げられているのである。人麿石見生誕説が、いつ、誰によって唱え出されたか定かではないが、少なくとも江戸時代には広く流布し、そしてその伝説は、今現在でも受け継がれてきている(注7)。なぜこのように『万葉集』を根拠としない伝承が、現代まで伝わっているのか、今一度、文献を見直してみる必要があるだろう。

三

かつて高津は津和野藩に属していた。津和野藩主は代々人麿信仰に厚く、人麿を顕彰するさまざまな事業を展開している[注8]。神道宗紀氏によれば、津和野藩主亀井氏二代茲政は、延宝九年に高津柿本神社を高津城址に移転させたが、高津柿本社には、その後裔となる歴代藩主の和歌作品が多く残されているらしい。高津柿本社への和歌奉納は、明石人丸社と比較して、数の上でも多く、期間も長いという[注9]。明和九年、現在の高津柿本神社に、津和野藩七代目藩主亀井能登守矩貞が碑を建てたのは亀井氏の人麿顕彰の一例である。人麿の伝記や、神社建立の経緯などを記した碑で、作文を大典禅師梅荘顕常に依頼したものである。台石は亀の形をしており、俗に「この碑文を立派に読むことができれば、台石の亀が動き出す」とも言われているそうだ[注10]。

この碑文を書くにあたり、顕常は人麿に関する様々な文献を読み、それらをもとに碑文の解説書とも言える本を出版している。それが『柿本人丸事跡考』である。明和九年十一月刊行の、一巻一冊本である。尾崎富義氏「『柿本人丸事跡考』について―翻刻と解題―」（『常葉学園短期大学紀要』第三十三号、平成十四年十二月）に翻刻と解説がある。内容は大まかに八つの段落に区切ることができる。

① 人麿の出身地について
② 人麿の妻と石見の歌について
③ 人麿出現説について
④ 語家について
⑤ 人麿の墓について
⑥ 人麿の位について
⑦ 人麿画と影供、人麿の入唐について
⑧ 柿本神社の由来について

ここでは、特に問題となる①③④⑧に絞って考察することとする。

まず、『柿本人丸事跡考』の①を引用する[注11]。

人麻呂ノ事跡タシカナルコト知ガタシ。日本紀ノ中ニ其ノ名ヲノセズ。倭歌ノミニシテ、他ノ事業ナカリシナルベシ。按ズルニ、天武紀ニ白鳳十年十二月葵巳、柿本猿等並十人ニ授ク二小錦下位一。同十三年十一月、大三輪君柿本等五十二氏ニ賜ヘ朝臣姓一トアリ。元明紀二柿本朝臣佐留アリ（コレ上ノ猿ト同人ナルベシ。）聖武紀二柿本朝臣建石、柿本朝臣濱名、柿本朝臣市守、柿本小玉等アリ。姓氏録太和皇別十八氏ノ中ニ柿本朝臣孝照（ママ）天皇之王子天足彦國押人命之後也。敏達天皇御世、依テ家門ニ有二柿樹一、為二柿本臣氏一。コノ姓氏録ハ嵯峨天皇弘仁四年（孫ニハ弘仁六年七月二十日トアリ）、萬多等親王及五臣奉勅ノ撰ニシテ海内姓氏ノ系属ヲ具列ス。同姓ノ者ナレドモ所出ヲ異ニスレハ、再三別出ス。然ルニ柿本氏ハ、右ニ出ルノミナレバ、人麻呂モソノ同族タルコト知ベシ。a古來相傳テ人麻呂ハ石見國ノ人也トイフ。右姓氏録ニテミレハ、柿本ハ太和國ノ望ナリ。人麻呂モ石見ヨリ太和ヘ出仕シテ、其ヨリ太和ノ人トナリタルトミユ（コノ説下ニ出ス。）元來ハ太和柿本氏ノ系属ニテ石見ニ生タル人ニヤ、又ハ孩提ニテ石見ヘ流落セルヤ、又ハ石見ノ人氏ニテ、縁由アリテ太和ノ柿本氏ヲ冒セルヤ、其事知ベカラズ。然レドモ右姓氏録ニ載タル柿本氏ノ外トハ謂ベカラズ。萬葉集ニモ柿本朝臣人麻

呂トアレハ、天武十三年賜朝臣姓ノ文ニ符合ス。

『柿本人丸事跡考』で顕常は、人麿について詳しいことは分からないと述べつつも、『日本書紀』に見える「柿本」姓の人物は朝臣の位を賜ったとしたうえで、『日本書紀』の「柿本」と『万葉集』の人麿は同族であると指摘している。注目したいのは、傍線部aにいう石見出身説である。

先に引用した『人丸秘密抄』自性論灌頂では、人麿は石見の地に出現したと断言されていた。この伝説に対し、顕常は『新撰姓氏録』巻之六「大和国皇別」を根拠として、論理的な考察を展開している。以下、栗田寛『新撰姓氏録考証』によりつつ(注12)、『新撰姓氏録』当該箇所を引用する。

柿下朝臣、(下を一本に本とあり、)大春日朝臣同祖、天足彦國押人命之後也、敏達天皇御世、依家門有柿樹、爲柿本臣氏、

○古事記に、天押帶日子命者、小野臣、柿本臣云々之祖也、とみえ、○柿下は本文に云るが如く、柿樹あるによりて負る姓にて、所謂事物によれるものなり、○天武紀に十三年十一月戊申朔、柿下臣、賜レ姓曰朝臣とあり、此氏人は、同紀に柿本臣猨、續紀・(一左)に柿本朝臣建石、十二(廿三左)に外従五位下柿本朝臣濱名、十七(廿四左)に従五位下柿本朝臣市守、十七左廿四に外従五位下柿本小玉、後紀廿一(七右)に従五位下柿本朝臣弟兄、爲肥前守、續後紀十二(卅左)に柿本安永、文徳実録(十七左)に従五位下柿本朝臣枝成などあり、○歌聖と呼はるゝ人麻呂も此氏にて、萬葉集に柿本朝臣人麻呂あり、本貫は大和なるべし、東大寺要録六(末寺章)に、柿本寺在大和國添上郡とみえ、今も葛下郡に柿本村あるを以て、姓氏録に合せ考ふべし、○神名式に、山城國紀伊郡飛鳥田神社一名柿本社とあり、神名帳に引る八坂寺文書に、私領田貳段、但稲荷御油段別壹升、進之、大江左衛門業尚先祖相傳私領也、在山城國紀伊郡柿本里、(自二大和大路一西云々、)貞應二年四月十六日左衛門尉大江判とある、柿本里は此氏によしあるか、未た考へす、

『新撰姓氏録』は、神武天皇の時代から弘仁期までの京畿の姓氏一一八二氏を皇別・神別・諸蕃・未定雑姓に分類した系譜書である。同書には「萬葉集に柿本朝臣人麻呂あり、本貫は大和なるべし」と書かれている。顕常は、『新撰姓氏録』を引用し、「柿本」は孝昭天皇の皇子、天足彦国押人命の子孫であり、「柿本」という姓は、大和の地方にのみ出てくる姓であると述べている。さらに顕常は、人麿は石見ではなく大和出身ではないかと主張している。大和の人間であるはずの人麿がなぜ石見の地に関係が深いのか、顕常はいくつかの憶測を立てているが、どれも確たる証拠はなく、「其事知ベカラズ」として答えを保留するに留まっている。しかしながら、「柿本」の姓や出身地について文献資料を用いて考察した結果の主張は、『人丸秘密抄』よりも客観的で説得力がある。

次に、③人麿出現説について考察する。③の本文は以下の通りである。

人丸秘密抄ニ曰、石見國美濃郡戸田郷小野ト云所ニ、語家(カタラヒ)命トイフ民アリ。アル時後園柿樹ノ下ニ神童マシマス。立ヨリトヘバ答テ曰、ワレ父モナク母モナシ、風月ノ主トシテ敷島ノ道ヲシルト、夫婦悦テコレヲ撫育シ、後ニ人丸トナリテ出仕シ、和歌ニテ才徳ヲアラハシ玉ヘリト。b此説怪誕ニチカシ。此ニ附テイロ〳〵ノ説アレドモ浅陋虚妄ノ所見ニシテ、却テ先賢ヲ誣辱ストイフベシ。混沌ステニ分レテ後ハ聖賢トイヘド

モ、父母ノ遺體ヲウケザルコトナシ。然ザレハ五行ノ妖精ニシテ人情ノ近クベキニアラズ。暗然タル所ヲモテ神徳ノ高キヲ知ベシ、ナド、附會欺罔ノ説ヲナス。彼八幡春日多武等ノ大神生没ノシレタルハ、神徳ヒキトイフベキヤ、人ノ形ヲ受來ルモノ誰カ父母ナカラン、誰カ生死ナカラン。況テ詠歌ハ情感ノ動ク上ヨリノモノナレハ、無情ノ處ヨリ化生セラル、道理ナシ。妻死シテ泣レ血ニ等ノ歌ニテモ人麻呂ノ情性シリヌベシ。

③では、語家という民家の柿木の下に人麿が出現し、人麿を語家の夫婦が育て、和歌の才徳を現すようになったとある。しかし、顕常は人麿出現説を傍線部b「怪誕ニチカシ」「淺陋虚妄ノ所見」として強く否定している。

以上、①③について見てみると、顕常は様々な資料を用いて客観的・論理的に伝説を見ており、柿木の下出現説も、怪しい話であると否定的な立場をとっている。『柿本人丸事跡考』には、江戸中期当時広く行われていた人麿をめぐる伝承の一々について、文献資料を参観しつつ、独自に検証しようとする姿勢が認められるのである。

四

ところが、④以降、顕常の主張に変化が見える。④の本文は以下の通りである。

然ルニカノc語家ノ家イマニアリテ、其處ヲ柿本ト名ク。人麻呂ノ小社アリテ語家世々コレヲ守ル。語家ハカタラフイヘト云義ニテ、人麻呂ノ寄託セラレシヨリノ稱ナリ。本姓ハ綾部野氏ナルヨシナリ。然モカタラヒ代々ノ通名ニシテ、寛保二年ノ比マテ三十八代血脈相續ス。シカモスグレテ長壽ナルモノ多シ。d先祖ヨリノ譜諜、故實ノ書物アリ。享保十年八月廿五日ニ梅樹ノ下ヨリ奇物ヲ掘出シ。神殿鳴動ノコトアリ。此ノ梅樹古ヨリアリシガ、今ハ枯テ蘖生アリ。又、e人麻呂出現セラレシト云柿樹アリ。其實細ク長シテ、末ノ尖黒ク筆ニ墨ヲ染タルカ如シ。因テ筆柿ト名ク。實アレドモ核ナク、老木ニナレハ他ノ柿樹ニツギトム。然モコノ處ト高角社ノ別當真福寺ノ庭トニ二本アルノミニテ、他處ニ接樹トナセバ皆常ノ柿ニ變ス。コノコト石見ノ金丸氏筆柿記ニ委クシルセリ。fコレニ因テミレハ語家カコト縁由ナキニアラジ。gモシハ人麻呂孩提ニテ父母ニ離レ、語家ニヤシナハレタル者ナルヤ、事實ノ知ザルコト惜ムベシ。又、敦光ノ讃ニ和歌之仙稟ニ性于レ天、一本ニ性ヲ姓ニ作ル。然レバ語家ノ説ニ同シテ氏族ナキコトヲ稱ストミユ。然レドモ稟性トアレハ、姓ノ字トナスハ誤ナルベシ。

④では、人麿が出現したという民家（語家）について述べている。傍線部に注目して見ていきたい。まず、語家は今も現存しているということ（c）、同家には先祖からの系図や書物が残っていること（d）、人麿が出現したという柿木があるということ（e）が挙げられている。そして、これらを見ていくと、人麿と語家は、無関係とは言い難いということ（f）が述べられている。

このことについて、片桐洋一氏『柿本人麿異聞』「江戸時代の人麿ブーム」（平成十五年、和泉書院）は、以下のように述べている。

（前略）「怪誕ニチカシ」とか「浅陋虚妄ノ所見」と言っておきながら、『人丸秘密抄』にいう「語家命」の家が、寛保二年（一

七四二）まで続いていて、三十八代にわたって伝わった譜諜故実を伝える書物が今に残っていることと、享保十年（一七二五）の八月二十五日に梅の木の下から奇物を掘りだしたことがあったが、この時、神殿が鳴動したと言う伝承と、そして人麻呂がその樹下から出現したと伝える柿の木もあるということ、さらにその柿の木は「筆柿」と言われるように筆に似て先が黒かったということ、さらにこの種の柿の木はこの戸田の柿本社と高角の真福寺（今の柿本神社）の庭に二本あるだけだということが石見金丸氏の著『柿記』に詳しく記されているということを知るに及んで、『人丸秘密抄』に見える語家命のもとに人麿が化生したという話もまんざらでたらめでもなさそうだという認識に変わって来ているかに見えるのである。

『人丸秘密抄』について述べている時には、おおむね的確な見識を示して批判していた大典禅師顕常が、その話が現に石見にある二つの人丸社にかかわったとたん、極端に甘くなってしまうのに驚く。

片桐氏が指摘しているように、③で柿木の下出現説を否定したにもかかわらず、語家や出現した柿木を容認するという矛盾が生まれている。顕常は矛盾を正当化するかのように「モシハ人麻呂孩提ニテ父母ニ離レ、語家ニヤシナハレタル者ナルヤ、事實ノ知ザルコト惜ムベシ」（傍線部g）と、「人麿は幼いころ父母と別れ、語家に養われたのではないか」との憶測を立てている。①③とは違い、語家を容認する理由を、資料も根拠もなく述べるようになっている点に注目したい。

続いて⑧を見ていく。

徹書記清岩茶話ニ曰、高津ノ山ガメグル所ハタケ中ニ實形造（ツクリ）ノ堂ニ人丸ノ木像ヲ安置シタリ。カタ手ニハ筆ヲトリ、カタ手ニハ紙ヲモチ給ヘリ。一年大雨ノ降リシニ、其アタリマデ水出テ、海ノ潮モミチテ海ニ成テ、此堂モ潮ガナミニ引レテ、イヅチトモナク行方シラスウセケリ。サテ水引タリシ後、地下ノ者其跡ニ畠ヲツクラントテ、スキクハナドニテ堀タレハ、何ヤランアタル様ニ覚ヘシ程ニ、掘出シテミタレハ此人丸ナリ。筆モオトサズ持テ、藻クヅノ中ニマシ〳〵タリ。タヾコトニアラズトテ、ヤガテ彩色シ奉テ、本ノ様ニ堂ヲタテ、安置シ奉リケリ。此事ツタヘテ二三箇國ノ者トモ皆々是ヘ参リタル由、人ノ語ルヲ承ル。此高津ハ人丸ノ住給ヒシ所ナリ。萬葉ニ石見ノヤタカツノ山ノ木間ヨリ我フル袖ヲイモミツランカ、ト云歌ハコヽニテ讀タマヒシナリ。是ニテ死去有ケルナリ。辭世ノ歌モ上句同物ナリ。石見ノヤ高津ノ山ノ木間ヨリ此世ノ月ヲ見ハテツル哉、トアルナリ云々。

柿本明神縁起ニ曰、高津ノ洋ニ昔ハ鴨嶋トイヘル大ナル鴨山アリテ、人丸モ是ニオハセシナリ。後一條帝御宇萬壽三年丙寅五月、海上ニ高浪起テ彼島ヲユリコボチ海中ニ没セリ。人丸御廟ニ二穂ノ松トテ名木アリケルガ、此浪ニ根ヲ絶ケリ。其後ソノ松枝ニ神像ヲカケテ近キ濱ニ打ヨセタリ。因テ其處ニ再ヒ社ヲ建立ス。コレヲ松崎ト云ト、茶話ノ説ト相違アリ。h何レニテモ道理ニ害ナケレハ、余カ碑文ニハ縁起ノ説ニシタガフ。

『徹書記物語』は正徹の著作であり、二巻から成る室町時代前期成立の歌論書である。顕常は、社が建つまでの経緯について、『徹書記物語』と「柿本明神縁起」の二説を参照している。『徹書記物語』

の当該箇所を確認しておこう（注13）。

一、人丸の木像は石見の國と大和の國にあり。石見の高津と云ふ所也。此所は西の方には入海有りて、うしろにはたかつの山がめぐれる所に、はたけ中に寶殿造の堂に安置申したり。かたてには筆を取り、かたてには紙をもちたまへり。木像にて御座也。一年大雨の降りし比は、そのあたりも水出、海のうしほもみちて海になりて、此堂もうしほか波かにひかれて、いづちとも行かたしらずうせ侍りき。さて水引きたりし後、地下のもの其跡に畠をつくらんとて、すきくはなどにてほりたれば、何やらんあたるやうにきこえしほどに、ほり出して見たれば、此人丸也。筆もおとさず持ちてもくずの中にまし〳〵たり。たゞ事にあらずとてやがてさいしき奉りて、もとのやうに堂をたてゝ安置し奉りけり。此事傳へて二三ヶ國のものども、みな〳〵これへ参りたりけるよし、人のかたりしを承侍りし。此高津は人麿の住みたまひし所也。萬葉に、

石見のやたかつの山の木間より我ふる袖をいもみつらんかと云ふ歌は、こゝにてよみたまひし也。是にて死去有りける也。自逝の歌も上句は同じ物也。

石見のや高津の山の木間より此世の月を見はてつるかなとある也。人丸には子細あること也。和歌の絶えんとする時かならず人間に再來して、此道を續ぎ給ふべき也。神とあらはれし事もたび〳〵也。

右に引用した『徹書記物語』の説は、寛文二年版本や多くの写本には認められず、寛政二年版本に所載の説であり、いつから存在した伝承であるか明確ではない。重要なのは、室町から江戸にかかる一時期に、石見ではなく都で、人麿は石見で死んだという伝承や、高津に人麿の社が建てられた経緯が語られていたことが重要である。人麿伝説が都で作られた可能性も想像させる。『徹書記物語』と類似した説は『石州高角鴨山正一位柿本大明神社略縁起』にも認められる。

則昔は高角の沖鴨嶋といふ所に御廟の社あり（尊像はいくとせふるともしらず、或霊の木像也。御目作といひつたへたり）一宇の寺あり、人麿寺と名づく（天平年中行基菩薩乃開基也。多分寺領世々除地ありし所、坂崎出羽守。御主たりし時、其高を減少すといへども、今に至りて除地猶残れり）しかるに、後一條院御宇万寿三年丙寅五月、けやけき高波うちよせて鴨嶌をゆりこぼち、民屋残らず海中に没せり。諸人我家宅を失ふことをうれへずして、唯尊像の漂失し給ふことをのみ歎きけるに、奇なるかな、彼御廟所の松とて二枝にわかれたるあり。是も彼浪に根を絶けるが、其松の枝に尊像を帯て近きわたりのはまに寄奉りぬ（此所を松崎とて。今に名を残せり）諸人奇異のおもひをなし、信感に堪ず、則亦其所に社を建、尊像を安置し奉りしよりこのかた、神威信祈にして国家を鎮護し、水火盗賊の憂ひ、疫病疫痢等の諸病にいたるまで、祈るに悉除せずといふことなし。

『徹書記物語』『石州高角鴨山正一位柿本大明神社略縁起』は、ともに高津柿本社建立の由来を述べる点で一致しているが、異なる部分もある。二つの所説を箇条書きにして比較してみたい。

『徹書記物語』

・高津の畑の中に堂を安置し、人麿の木像を据える
・ある年、大雨が降り、堂が流される
・土地の者が畑を作るため地面を掘ると、木像が現れる
・木像を彩色して再び安置する

『石州高角鴨山正一位柿本大明神社略縁起』

・昔、高角の沖の鴨嶋に御廟の社があった
・万寿三年五月、高波が起きて鴨嶋は沈み、人麿の尊像も流された
・御廟の側に生えていた松の枝に引っかかって、尊像が松崎に打上げられる
・その場所に再び社を建て、木像を安置した

「社が建っていた地を災害が襲い、像が流れ着いた場所に再び社を建てた」という流れは両書に共通するが、『石州高角鴨山正一位柿本大明神社略縁起』では、災害の年次と種類、土地の名前、像が発見された状況など、細部まで具体的に明記している。『徹書記物語』における曖昧な記述は、伝説・伝承の特徴とも考えられよう。享保八年刊の『石州高角鴨山正一位柿本大明神社略縁起』は、同年の人麿千年忌を記念して刷りたてられた配り本と目され、高津柿本社に伝わる縁起をまとめたものと思われる。顕常の見た「柿本明神縁起」とほぼ同じ内容を有すると考えてよいだろう。『徹書記物語』と高津柿本社縁起の相違は、時代をくだるにつれて、伝説・伝承がしだいに変化し、事実めかした具体性を帯びていったことを想像させる。

しかしながら、『徹書記物語』と高津柿本社縁起の相違点について、顕常は、傍線部h「何レニテモ道理ニ害ナケレバ、余ガ碑文ニハ縁起ノ説ニシタガフ」と、あたかも論理的に読む姿勢を放棄しているかのように見える。『柿本人丸事跡考』前半部では、人麿伝説について冷静に批判していた顕常だったが、高津柿本神社の由来に関しては、うってかわって疑問や批判も挙げていない。

顕常の主張は、ここに至って、大きく変わっていることが読み取れる。あれほど批判していた伝説・伝承を容認するかのような立場へと変化していくのである。なぜ顕常はここまで意見を変えながら主張しているのだろうか。

『柿本人丸事跡考』の前半部において、顕常は嘘のような伝説をあからさまに取り上げ、これを批判することで、客観的に意見を述べる姿勢を読者に示したのではないだろうか。顕常の客観的記述と伝説批判は、伝説を学術的に見ているのだと、読者に示すことができる。そのように記述することで、『柿本人丸事跡考』に書かれている人麿伝承は、学問的に証明された伝説であると読者が考えるようになる。しかしながら、高津柿本社の由来そのものを否定することは、求められて碑文の制作に携わる以上、あり得ないことであった。顕常は、高津柿本社の縁起は最初から無批判に読まざるを得なかったわけであるが、そこに至る前段として、いったん人麿石見生誕説を批判するという文献学的考証の姿勢を示したのである。この姿勢によって、柿本神社を取り巻く伝説は相対的に正当化されていく。

では、なぜこのような書き方をしてまで伝説を正当化する必要があったのか、その背景についても簡単に考察しておきたい。顕常が『柿本人丸事跡考』を書いたのは、津和野藩主亀井矩貞に碑文を請われたことがきっかけであり、碑文に書いた文章を補足する資料として書いたのが『柿本人丸事跡考』である。亀井氏は、学識者である顕常に碑文を請うことで、柿本神社に伝わる伝説を学問的に保証してもらおうと考えていたのではないだろうか。そのことを受け、顕常は亀井氏の人麿信仰を学術的に補強する役目としてこのような書き方をしたのであろう。その上、顕常はこの本を出版までしてい

る。このことからも、伝説を正当化する他に、伝説を広めたいという考えを持っていたことが伺えるのではないだろうか。

五

人麿に関する伝説・伝承は、時代を経るごとに多様に変化してきた。石見でも例外ではなく、『万葉集』から離れた伝説が伝わっている。石見における人麿伝承を検証するにあたり、万葉の時代と現代を一足飛びに結びつけて考えようとする試みは少なくない。しかしながら、万葉の時代にあったものと、現在残っているものとを照らし合わせて、伝説の真偽を考えるよりも、現代に語り継がれてきた伝説は、どのように変化し、どのように受け入れられ、どのように人々に影響を与えてきたのか、伝説の享受に関して考えることのほうがより生産的ではないか。高津柿本神社をめぐる伝承は、鴨山があったか、依羅娘子はどこの出身かという真偽の部分だけではなく、江戸時代に亀井氏の代々が築いてきた人麿信仰を、津和野藩の人々が受け入れて継承し、それが今日の人麿伝承の基盤となっているという事実を忘れてはならない。

（注）

1 神道宗紀『和歌三神奉納和歌の研究』第五章「その他の奉納和歌第四節「高津柿本社の場合」（和泉書院、平成二十七年）。初出「人麻呂終焉の地と津和野の人々―万葉集および高津柿本社奉納文書から―」（『地域文化の歴史を往く―古代・中世から近世へ―』、和泉書院、平成二十四年）

2 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳者　新編日本古典文学全集『萬葉集①』（小学館、平成七年十二月）

3 『高津町誌復刻版』（高津の歴史と文化を考える会、平成二十一年）による。原『高津町誌』は、安田友久編、高津町尋常小学校、昭和十三年刊。

4 片桐洋一『柿本人麿異聞』第一章「『古今集』の人麿」（和泉書院、平成十五年）の説明を参考にした。

5 京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵大惣本稀書集成』第十巻（臨川書店、平成七年一月）所収本による。

6 筑波大学図書館本による。

7 益田市ホームページには、人麿は戸田で生まれたとの紹介がなされている（www.city.masuda.lg.jp）。

8 『石州高角鴨山正一位柿本大明神社略縁起』に、茲政による柿本社遷座、茲親による境内の増修繕について触れられている。また、神道宗紀「高津柿本神社蔵書目録」（『帝塚山学院大学日本文学研究』第三十七号、平成十八年二月）および「高津柿本神社蔵書目録補遺」（『帝塚山学院大学日本文学研究』第四十号、平成二十一年二月）によれば、歴代藩主が柿本社に和歌奉納を続けたことが知られる。

9（注1）参照。
10現高津柿本神社配布の「正一位柿本大明神祠碑」解説による。
11尾崎富義「『柿本人丸事跡考』について―翻刻と解題―」の、明和九年十一月、京近江屋庄右衛門他二軒版翻刻による。
12田中卓校注『神道大系　古典篇六　新撰姓氏録』（神道大系編纂会、昭和五十六年）所収、栗田寛『新撰姓氏録考証』（昭和五十六年二月）による。
13佐佐木信綱編『日本歌学大系　第五巻』（風間書房、昭和十五年）による。

〔付記〕
本稿は、平成二十七年度山口大学人文学部国語国文学会での口頭発表に加筆修正したものである。席上及び、発表後に諸先生方から貴重なご指導、ご意見を賜った。また、これに先立ち、平成二十六年六月に高津柿本神社を訪れ、宝物殿を拝見し、柿本神社および同社の石碑に関するお話を直接ご教授頂いた。この場を借りて深謝申しあげます。

（ゆきの・まゆこ）